

いわき「文化」の系譜学

—「炭鉱文化」の正典化と「原発文化」の挫折—

稲垣 綾

はじめに

未曾有の大災害は語りの膠着を生む。たとえば、「絆」——これは3.11以後の日本社会におけるキャッチフレーズのひとつであるといえよう。3.11を機に、その「きづな¹⁾」をコンセプトに掲げはじめたテーマパークがある。「スパリゾートハワイアンズ」、福島県いわき市にある大型レジャー施設である。東日本大震災に伴い全館休業を余儀なくされながらも、休業中は「全国きづなキャラバン」を実施するなどの前向きな活動によって、瞬間に全国的にその名が知られることとなった。その甲斐あって、利用者数は2011年度こそ入場者数は37万人と激減したものの、12年度には震災前に近い130万人台にもどる見込みとされている²⁾（「全国きづなキャラバン」については、本書小幡論文を参照ください）。

「楽園・スパリゾートハワイアンズ」。これは、「廃墟・フクシマ」とは正反対の語りのように思われる。だが、「スパリゾートハワイアンズ」を「復興の象徴」のように語る物語というのは、結局のところ「廃墟としての被災地」を前提とした「被災地の物語」である。3.11以後の現在では、この「被災地の物語」が、あらゆるフクシマ語りのベースになっている。清水一利の『フラガール 3.11—つながる絆—』（2011 講談社）などはその典型といえよう。

ここで、いわき市の歴史を一瞥する役割も兼ねて、3.11以後の「スパリゾートハワイアンズ」語りの中でもとりわけ奇妙なものをひとつ紹介したい。東京書籍の中学校社会科教科書『新しい社会 〔歴史〕』（平成24年度版）では、「町の変化から歴史を探る」というタイトルの下、4ページ（pp. 244-227）にわたっていわき市が取り上げられている。その最初のページに掲載されている文章を見てみよう。

わたしたちの住むいわき市は、近現代の歴史に大きくかかわりのある地域で、江戸時代の末期に石炭が発見され、明治時代の富国強兵、殖産興業の波に乗って本格的な炭鉱が開発され、操業を開始しました。大正、昭和の時代、石炭は「黒いダイヤモンド」とも呼ばれ、いわき市は石炭の町、

常磐炭鉱の中心都市として栄えたそうです。しかし戦後は、エネルギー革命や外国からの輸入によって、炭鉱はつぎつぎ閉山に追い込まれていきましたが、その中で、新たな産業として「常磐ハワイアンセンター」という観光産業を生み出しました。現在は、さらに経営の形態を変え「スパリゾートハワイアンズ」となって地域の行楽の中心となっています。

わたしたち歴史探検隊は、こうしたいわき市の歴史をふまえて、「これからのいわき市」について提案していこうと考えました。

一読して明らかなように、この文章には「被災」という語りが欠けている。『「これからのいわき市」についての提案』も最後のページにいくつか書かれているのだが、そこでも震災や原発に関しては一切触れられていない。この例はなんと「被災」を黙殺している、という特殊な語りである。これは、教科書というメディアでのみ起こりえた、極端な語り落としてであるといえよう。

教科書というのは子どもにとって、ひいては市民にとって、ある種の正典としての側面を持っている。そこで述べられている内容の影響力が強いことは言うまでもない。そうであるからこそ、教科書の語りにおいてはそれが否定的なサンクションを与えてしまうようなラベリングは何に対しても慎重に避ける必要がある。したがって、教科書で語られる「いわき市」では震災は起きていない。原発の被害もない。

この教科書の例のように「被災」を全く語らないことには、多くの人が違和感を覚えることだろう。それでは「被災地の物語」についてはどうだろうか。全く語らないことと同様に、「被災地の物語」への一面化もまた、構造的に語り落としを生むことになる。そこで語り落とされてしまうものとは何か。3.11以後の世界では語られていないフクシマの物語を発掘し、語り直すこと、それによって現在の凝り固まった物語を解きほぐすことが、本論の目的である。

「スパリゾートハワイアンセンター」 成立史

(1) 「常磐ハワイアンセンター」とは何者であったか

先ほどの教科書の語りの別の点に目を向けよう。「常磐ハワイアンセンター」(以下「ハワイアンセンター」)が「スパリゾートハワイアンズ」(以下「ハワイアンズ」)になった、という歴史は語られている。しかし、何がどのように変わったのか、ということは「経営の形態」というだけで詳しく述べられていない。246ページには、映画『フラガール』におけるフ

ラ・ショーの場面の写真が大きく掲載されているのだが、この写真に象徴されるようなイメージは「ハワイアンセンター」のものなのか、「ハワイアンズ」のものなのか、それともその両方なのだろうか。実はこの「語り落とし」は、この教科書に限ったことではない。3.11 以後の「ハワイアンズ」語りでは、その多くが「ハワイアンセンター」から「ハワイアンズ」への変化を、名称の変化・設備の拡大ということ以上に詳しく語っていないのだ。

では当時の語られ方はどのようになっていたのだろうか。「ハワイアンセンター」が「ハワイアンズ」へと名称変更を遂げたのは、1990 年（平成 2 年）のことである。公式ホームページによると、「総事業費 50 億円をかけて「スプリングパーク」（南欧風の温泉）をオープン」³⁾したことを契機にしたという。名称変更直後の雑誌記事の見出しには、①「常磐ハワイアンセンターが大変身スパリゾートハワイアンズだと」（『週刊文春』1990 年 5 月 24 日）②「あの常磐ハワイアンセンターが、トレンドィな温泉リゾートに大変身。「スパリゾート・ハワイアンズ」」（『エフ』1990 年 6 月）③「変わる“日本のハワイ”「夢のハワイ」から「日本の樂園」へ※常磐ハワイアンセンター」（『週刊エコノミスト』1990 年 9 月 18 日）、といったものがある。①の本文は次の通り。

爺っちゃんや、婆っちゃんが温泉に入って、演芸を見ながら酒をカックラってるイメージでは若者に受けないと、常磐ハワイアンセンター（福島県いわき市）がスパッと大変身。その名もスパリゾートハワイアンズなんだそう。

（中略）平たく言えば遊園地のプールの“いい湯だな”版なのだ。

この「爺っちゃんや、婆っちゃんが温泉に入って、演芸を見ながら酒をカックラってるイメージ」というのが、②の見出しに「あの常磐ハワイアンセンター」と言わせた所以であろう。③の記事でも、「これまでのお年寄りや家族連れ中心のヘルスセンター的イメージを払拭するためにも、ヤング層の開拓が不可欠だった」とある。

しかし一方で、このように語られているということは、「ハワイアンセンター」がそのようなイメージとしてならずすでに周知の、有名な施設であり、決して地元の人しか知らないようなマイナーな施設ではなかった、ということも示している。つまり「ハワイアンセンター」から「ハワイアンズ」への変化というのは、「若者を呼び込む戦略」というのが、当時の一般的な語りであったといえそうだ。

(2) 「いわき自前のハワイ」へ

次に、「スバリゾートハワイアンズ」という名称に変わってからの語られ方をいくつかの時点で見ていきたい。まずは1997年10月『自由時間』の記事を見てみよう。

30年前の庶民にとってはまだまだ憧れの島、遙か彼方にある夢の島だった。そんな時代に（中略）登場したのが、常磐ハワイアンセンター（現スバリゾートハワイアンズ）である。関東・東北にお住まいの方なら一度は訪れたことがあるのではなからうか。行ったことがなくても、名前は聞いたことあるでしょう？

名称変更から7年経っているが、この時点でも「常磐ハワイアンセンター」という名称が未だ用いられている。また、文章の後半が示す通り、関東東北地域の人にはなじみのある施設であったことがここでも確認できる。

この10月19日、新しい施設がオープンする。3000平方メートルの大露天風呂・江戸情話「与一」だ。しかし、露天風呂ができて、ここはやっぱりハワイアンズだ。太平洋のハワイとはちょっと違う、いわきの自前のハワイだ。

この年、「ハワイアンズ」は、南欧風の「スプリングパーク」に加えて和風の露天風呂も新たにオープンさせた。そのような「ハワイアンズ」の変化を受けて、この記事の語りにおいては、現実の「ハワイ」といわきの「ハワイアンズ」とが区別されている点が興味深い。これは次に見ていく記事に、よりはっきりした表現で示されている。

2002年10月12日の『週刊東洋経済』を見てみよう。この記事で最初に目が行くのは見出しの横の「ほかの施設にはない懐かしさ、泥臭さが地元客を魅了。地元客に支えられリピーター率は88%」という数字である。

「ハワイアンズっていったい何?」。そう、年配者には「常磐ハワイアンセンター」というかつての名称の方がなじみ深いかも。地元でも五〇歳以上の人はいまだに「センター」と呼ぶ。

ハワイへのこだわりを捨てたころから再び転機を迎える。開業当時の目玉だった「ウォーターパーク」に、ハワイとは全く趣の異なる新施設を次々と継ぎ足していく。南欧風温泉の「スプリングパーク」、日本一大きい露天風呂「与一」など、四つのテーマパークを相次いで立ち

上げた。

「スプリングパーク」と「与一」以外の2つは、1999年にオープンした「ウィルポート」（地中海をイメージ）と、2001年にオープンした「スパガーデンパレオ」（未知の樂園）である。このようにして、「ハワイアンズ」は「ハワイへのこだわりを捨てて」、現実の「ハワイ」とは異なったイメージを打ち出していったのである。

一方でこの施設はあくまで「ハワイアンズ」という名称であり、それは「いわき自前のハワイ」と呼ばれもする。この場合の「ハワイ」とはしかし、もはや現実の「ハワイ」のイメージを必要としない自立した「ハワイ」なのだ。それは同記事中の坂本征夫（常磐興産執行委員）のこの一言に端的に表されている。

「お客さんを引き付けるのはここに文化があるから」

「文化がある」というのはどういうことか。実は「ハワイアンセンター」の時代から「ハワイアンズ」に名称が変わっても、またこの2013年の現在に至るまで、営業日には一日も欠かすことなく行われているイベントがある。「ポリネシアンショー」である。これは、「フラのゆったりとしたリズムだけでは日本人は満足できない」「タヒチのリズムは八木節に似ている」という創業時の副社長中村豊のアイディアによるものらしく⁴⁾、つまり、このショーは「ハワイアンズ」のオリジナルなのである。しかし、それでも全く構わない。「ハワイ」であろうと「タヒチ」であろうと「日本」であろう「南欧」であろうと、構わない。重要なのは「続いている」ということ、「続けている」ということである。

文化は土地に根付いており、それが自明のことであるかのように思われがちだが、「いわき市」と「ハワイ」の関係は、もちろんあらかじめ与えられたものではない。そこには時間をかけて土地の人々が産業を、人間関係を、独自のダンスを、形成・獲得していった過程があるだけだ。そしてそれこそが、今や現実の「ハワイ」なしでも自立できるいわき独自の「ハワイ」を生んだのである。

「炭鉱文化」／「原発文化」

(1) 正典としての「炭鉱文化」物語

坂本の「文化がある」という言葉には、さらなる含意がある。「ハワイアンセンター」設立以前からこの地に脈々と受け継がれているもの、それ

は「炭鉱文化」だと、彼は言う⁵⁾。ここではその語りを詳細に辿ることはできないが、そもそも「ハワイアンセンター」が設立された一番の理由は、炭鉱が衰退していく中で人々の雇用を確保するためだったという。その意味では「炭鉱文化」こそが「いわきのハワイ」を確立するに至った原動力なのだ、という物語は非常に強力である（詳しくは前出の小幡論文をごらんいただきたい）。先の教科書もこの語りを採用し、「炭鉱の衰退」→「観光産業」と語ることによって、この物語をキャンノン化に加担しているもののひとつであるといえよう。

フリージャーナリストの熊谷博子も、著書『むかし原発 いま炭鉱一炭都[三池]から日本を掘る』⁶⁾の中で、常磐炭田について短く言及している。

首都圏に近い常磐炭田では、映画『フラガール』にもあるように、早くに温泉を活かしたリゾート経営に切り替えたり、71（昭和 46）年には5千人の大失業者を出したが、そのほとんどが再就職できた。これはまれなケースである。

正典通り、雇用創出の手段としての「リゾート経営」という語り方がなされている一方で、「首都圏に近い常磐炭田では」という語りも含まれている点は注目に値する。福島県は首都圏と東北地方のはざまにある土地なのだ。それは好むと好まざるとにかかわらず、何かにつけて首都圏の論理に取り込まれる可能性をつねに孕んでいるということである。もちろん「ハワイアンズ」も例外ではなく、首都圏からの客は全体のうちかなりの割合を占める⁷⁾。前節で、「ハワイアンセンター」のころから関東の人々にとってはなじみのある施設だったということを示したが、首都圏に近いということこそが炭鉱没落後に他の炭鉱では例をみないほどの持ち直しを見せた、いわき市再生のカギだったのである。

このことを考えると、映画『フラガール』に典型的にみられるような、「『炭鉱文化』がこの土地を再生させたのだ」という語りもまた何かを語り落としているのではないか、という可能性を窺うことができる。『フラガール』的な語りでは取りこぼしてしまうものがあり、それを放置し、目を背けてきたがために先の大災害が引き起こされたときさえいえるかもしれない。ではその「取りこぼし」とは一体何だろうか。

(2) 「原発文化」はありえない？

先の熊谷によるいわき市への言及には続きがある。

…これはまれなケースである。炭田は茨城県にもまたがっていたか

ら、東海村にできた動燃（動力炉・核燃料開発事業団、現在は日本原子力研究開発機構に再編）に入った人々もいた、という。

炭鉱の衰退によって出た大多数のうち、「ハワイアンセンター」に就職できた者もいた。しかし、一方で同時に、この炭鉱の衰退は「核燃料」のちに「原発」とも深くかかわることになる場所へと人材を供給しもしたのだ。

また、熊谷は上記の著作の冒頭、「まえがきに代えて」として次のように述べている。

「むかし炭鉱、いま原発⁸⁾」

次々に起こるニュースに見入る中で、思わず頭に浮かんだ言葉だ。…そんな日本を動かすエネルギーをつくり出してきたのは、いつも地方の、名もない無数の労働者たちであった。

構造があまりにも似ていた。

だが同じに見えても、炭鉱と原発には決定的な違いがある。

炭鉱は文化を生み出したが、原発は文化を生み出さなかった。

熊谷は「原発は文化を生み出さなかった」と一言で済ませてしまっているが、果たしてほんとうに「原発文化」などないのか、なかったのか、ありえないものなのだろうか。3.11 以後である現在、原発が文化化するなど、確かに考えにくいことである。それを発掘するのは困難かもしれないが、確認可能な限りの資料を用いて、語ってみよう。

(3) 「原発文化」としての「福島第二原発エネルギー館」

ここでいささか唐突なようだが、「福島第二原発エネルギー館」（現在は休館中、下図：東京電力 HP より）という施設を紹介したい。ここは東京電力（株）福島第二原子力発電所が運営する原子力発電所 P R 施設であり、いわき市からすぐのところにある双葉郡富岡町に設立されている。設立の理念は次のように述べられている。

エネルギー館は、（中略）1988 年に原子力理解活動の拠点と地域の方々のふれあいを目的に設立しました。建物は原子力発電に貢献した 3 人の偉人の生家をモデルとした洋風の外観です。原子力のしくみについてわかりやすく



学ぶことができます。また、発電所構内の見学も実施しています。⁹⁾

この「福島第二原発エネルギー館」は、『じゃらん』や『るるぶ』などの旅行情報誌にも取り上げられているのだが、施設の利用は無料、ゲームコーナーやビデオ鑑賞などができ、来館スタンプを集めるとグッズをもらうことができるなど、子ども連れにも好意的に受け止められていたようだ。写真を見るとテーマパークのような外観であり、実際に利用者レビューを見ても、施設の評価はさほど悪くなかったことがわかる¹⁰⁾。

実は、この「福島第二原発エネルギー館」は、震災前にも新聞紙上のニュースになったことがある。「ジブリと原発『同居』解消」というのが、その記事の見出しである¹¹⁾。これは、宮崎駿監督のアニメで知られる「スタジオジブリ」のキャラクター商品を販売する店舗「どんぐり共和国」が、「福島第二原発エネルギー館」に出店していたところ、インターネット上で「ジブリが福島原発のPRに協力している」と話題になり、その結果出店取りやめとなった、という内容のものであった（このニュースについては本書中場論文にも言及がある）。その記事中の次のような語りがある。

「どんぐり共和国」は、東北地方に同店を含めて2店舗しかなく、年間約8万人の来館者の間で人気という。

「どんぐり共和国」は全国に店舗を構えるチェーン店であるが、ここで注目したいのは、東北に店舗をつくる際に、この「福島第二原発エネルギー館」が選ばれたということ、そしてそこに根付きつつあったということである。「いわき市」と「ハワイ」の関係に自明性がなかったように、「原発」と「フクシマ」や「原発」と「ジブリ」に自明な関係性など何もない。それでも、それが広く受け入れられ、長く続けられ、その土地に根付き、それを誰も疑うことがなければ、「原発」もまた文化化しうるのである。

この「どんぐり共和国」の件では、インターネット上で「疑い」が提示されたがため、それらの関係性が改めて問われることになった。しかし、もしもそうならなかったら？と問うことは可能である。また、このインターネット上での「疑い」は、あくまで「ジブリが原発をPRしている」ことに対して向けられていたのであり、「原発PR施設なるものが福島県にあること」や「そこには年間多くの人々が来館し、楽しく過ごしている」ことに対する「疑い」ではなかった。この事例から、「福島第二原発エネルギー館」はれっきとしたひとつの文化であったと考えることができる。

「スパリゾートハワイアンズ」と「原発文化」の挫折

「福島第二原発エネルギー館」は、「ハワイアンズ」とも、少なからざる関係をもっている。『るるぶ』では、「ハワイアンズ」を単独で取り上げたものが、震災前である2003年～2011年までに6冊刊行されているが、それぞれの中での「ハワイアンズ」に関する語り方は、少しずつ異なっている。ここではその中から「いわきとその周辺のおすすめスポット」という特集のページの違いについて、比較検討してみたい。

2003年、2004年、2005年と3年連続で刊行された三冊を見ると、いずれもこの特集の最後「その他のエリア」というカテゴリー¹²⁾において真っ先に挙げられているのが「福島第二原発エネルギー館」なのである。いわき市にあるわけではないため掲載は後ろのページになってしまっているが、とはいえほかの施設・観光地と並べてみても、比較的大きく取り上げられていることがわかる。

これに変化が生じるのは次の2006年刊のものにおいて。実はこの年に映画『フラガール』が公開されたのであり、『るるぶ スパリゾートハワイアンズ』全体にも大きく変化が生じているのだが、この「いわきとその周辺のおすすめスポット」だけに焦点を当てると、なんとこの2006年以降に出版されたものでは、「その他のエリア」というカテゴリー自体がなくなっているのである。『るるぶ』内における「福島第二原発エネルギー館」の名は、なんとか周辺地図上にささやかに名を残すのみとなった。

この『るるぶ』をめぐる「福島第二原発エネルギー館」の語り方の変化は、福島県という土地の地政学的デメリットが抱え込む緊張関係を端的に示す事例である。2005年までは、「原発」といかに共生するか、「原発」さえもいかにして「文化とする」か、ということが模索されていた。この時点では、「ハワイアンズ」もまた「原発」を「文化」と認めざるを得なかったのだ。首都圏からいかに利用客を招くか。首都圏にいかに（エネルギー供給をはじめとして）貢献できるか。そのような首都圏依存の物語がむしろ強力だったからである。それに対し、映画『フラガール』を機に自身が文化力を増し、『炭鉱文化』がこの土地を再生させたのだ」という物語をそれ以前の物語に代わる力強い物語として提示・確立した後は、「原発」を「文化化」しないような語りが可能になったのではないだろうか。したがって、2006年以降の「ハワイアンズ」語りにおいて、「原発文化」はその立場を失うことになった。

語りの発掘を終えて —これからどこへ向かうか

冒頭、「未曾有の大災害は語りの膠着を生む」と述べた。3.11以後の世界で「あたりまえ」とされている物語を語り直すことで、原発事故という人災を引き起こした構造の一端を垣間見ることができないのではないか。本論はそのような動機によって書き起こされた。発掘できた物語は、大きく二つある。

一つは、「ハワイアンズ」は現実の「ハワイ」から独立したいわき市のオリジナルなのだという語り。「全国きずなキャラバン」以後、「被災地の物語」と切り離せなくなってしまっていた「ハワイアンズ」の3.11以前の姿を語り直すことによって、「ハワイアンセンター」から「ハワイアンズ」に受け継がれる「泥臭さ」を発見するとともに、「文化がある」とはどういうことかを考察するに至った。

もう一つは、「原発文化は存在した」という語りである。3.11以前には、フクシマの人々にとっては「歓迎」とは言えないまでも、「原発文化」というものが確かに存在していたのだということを、3.11以後の現在においてこそ、いま一度提示したい。このフクシマの「原発文化」は、映画『フラガール』をきっかけにして『るるぶ』の語りから消え、今回の震災で、いよいよ語られる場所をなくした。成立・確立しようとしていたこの文化は、これら二度の挫折の末に、現在では「なかったこと」にされている。以上の二つの観点から、「炭鉱文化」だけに接続されていたいわき市の「文化」の系譜を、「原発文化」にも接続する可能性を見ることができたのではないだろうか。

この論の導入として「いわき市」を取り上げた教科書の語りを採用した。この例のように独自の論理で構成される教科書のような極めて特殊なメディアには組み込めないとしても、本論で明らかになったような（ある種「フクシマ」に「負のサンクション」をも与えかねないような）語りを「タブー」とせず語れる場がどこかにあってほしい。なぜならその姿もまた「フクシマ」であり、そこから目を背けては、「フクシマ」を「被災地」にしてしまったメカニズムそれ自体には迫ることができないし、何も変わらないからだ。本稿で目指した語り直しは、現在を破壊し糾弾するためのものではない。3.11以後の語りが間違っていると、ましてや悪い、というわけでは全くない。しかし「原発反対!」「絆!」と安直な物語に飛びつくことなく、それ以前にあった物語にも目をけることでむしろ現在がクリアに見えるようになれば、それはかならずや現状を乗り越えていく

ヒントとなりうるはずだ。

注

- 1) きづな：「人と人の結びつき、離れないようつなぎとめる綱（つな）」を意味するところから、その大切さをより強調するよう“つな”を用い“きづな”としています。『『きづなりリゾート』の考え方 スパリゾート ハワイアンズ』
<http://www.hawaiians.co.jp/information/kidunaresort.html>
- 2) 渥美好司「(ザ・コラム) 結束のDNA フラガール、復興のステップ」『朝日新聞』2013. 1. 6
- 3) 「ハワイアンズヒストリー スパリゾートハワイアンズ」
<http://www.hawaiians.co.jp/profile/history.html>
- 4) 永江朗「いつだって“夢のハワイ”だった。 常磐ハワイは今日も行く。」『自由時間』マガジンハウス 1997. 10, p78
- 5) 面澤淳市「斜陽の炭鉱からリゾート産業へ転換し、雇用を守ったスオアリゾートハワイアンズ」『フォーブス』2005. 8 ぎょうせい pp. 154-158
- 6) 熊谷博子『むかし原発 いま炭鉱——炭都[三池]から日本を掘る』2012 中央公論新社 p154
- 7) 例えば、公式ホームページにある交通案内のページでも、「関東、新潟、仙台、宇都宮・高崎」の順に紹介されている。「基本情報 スパリゾートハワイアンズ <http://www.hawaiians.co.jp/access/index.html>
- 8) 熊谷前掲書 pp. 1-3（書き出しは「むかし炭鉱、いま原発」であるが、前掲通り、この著書のタイトルは『むかし原発 いま炭鉱』である。今こそ「炭鉱」の過去を見つめ直そうという著者の意図したものであろう。）
- 9) 「原子力情報 福島第二原子力発電所トップ 東京電力」
http://aoisora.org/genpatu/2011/tepcodata/20110409151130/index_178.html
- 10) 「福島いわき・双葉 東京電力福島第二原子力発電所エネルギー館のクチコミ・評判情報 じゃらん」
http://www.jalan.net/kankou/070000/073200/spt_guide000000107030/kuchikomi/?spotId=guide000000107030&afCd=&rootCd=&screenId=OUW2001&vos=&efcid=
- 11) 小堀龍之「ジブリと原発「同居」解消」『朝日新聞』2010. 8. 30
- 12) 「いわき駅周辺」→「小名浜」→「いわき郊外」→「北茨城市」→「そ

の他のエリア]、「いわき周辺のおすすめスポット」『スパリゾートハワイアンズ（るるぶ情報版—東北）』2003. 2, JTB, pp. 65-73

○「ふくしま教育情報データベース」というHPから、福島県内の過去の教育資料などにアクセスできるが、その中にもいくつか「原発文化」の断片がみられる。たとえば双葉町（現在も警戒区域）の過去の要覧には、「誰もが住んでみたいと思うような町」として、「総合公園整備事業、野外レクリエーション施設事業などの大型プロジェクト」などととも、「原子力発電所によるプラスの波及効果を町活性化にいかし」たい、とある。

○福島県以外の「原発文化」の例。泊原子力発電所を有する北海道古宇郡泊村は『「エネルギーのふるさと」をキャッチフレーズに村づくりを進めてきた』という。（「エネルギーのふるさととまり 泊村ホームページ」参照）

○2012年は震災関連の展覧会でいくつか面白いものがあったので、それも扱ってみたかったです。「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産」（国立民族博物館など）、「発掘された日本列島 2012」（堺市博物館など）、「地球の上に生きる 2012」DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展（京都造形芸術大学など）、「3・11とアーティスト：進行形の記録」（水戸芸術館現代美術ギャラリー）など。

○「スパリゾートハワイアンズ」＝「福島県」という記号が震災前に成立していた資料証拠のひとつ。土曜ワイド劇場 2008年11月29日放送「失踪調査人・港亮介」の中で、ストーリーとは無関係にも関わらず、「福島県に辿りついた」ということを示すためだけに、一瞬スパリゾートハワイアンズが映るシーンがある。

（参照：

<http://www.tv-asahi.co.jp/dwide/contents/nextweek/0021/>）

○自分の関心から出発したのではなく、先生にテーマを与えられた形だったので、予備知識がなくて最初が大変でした。

稲垣綾